

# JAPAN MEN'S SOFTBALL

2016  
NOVEMBER

日本男子ソフトボール

フィールドの軌跡



FOOTPRINTS

ON THE FIELD

# FOOTPRINTS ON THE FIELD



1996年のアトランタオリンピックから4大会連続で女子ソフトボールが正式種目として行われ、シドニーで銀メダル、アテネで銅メダル、北京で金メダルと3大会でメダルを獲得したこともあり、ソフトボールは「女子」のスポーツというイメージが定着している。

しかし、実際には、「競技」としてソフトボールを行い、公益財団法人日本ソフトボール協会へ登録しているチームでは、「日本リーグ」のチームをはじめとする実業団チーム、クラブチームでは圧倒的に「男子」の登録数が多く、競技人口も多いのが現実である。

学生種別でも、大学では男子のチーム登録数が上回り、高校、中学では圧倒的に女子が多いものの、小学生では男子の登録数が圧倒的に多いという現象が見られる。

これは、小学生の段階では、スポーツ少年団等、「野球の導入段階」的にソフトボールをはじめの選手が多く、中学校・高校では「花形」スポーツの野球があることもあり、「男子ソフトボール部」の部活動はごく稀にしか存在しないのが実情で、小学生段階ではあられだけのチーム登録数、競技人口がありながら、その「受け皿」となるべき部活動がなく、競技から離れていってしまう状況にある。

これが高校を卒業すると、大学でソフトボールに転向する者や社会人になってから野球経験者がソフトボールをはじめのケースも出はじめ、特に中高年になると「壮年」「実年」「シニア」といった生涯スポーツのカテゴリーで、ソフトボールに「戻ってくる」現象が顕著になる。また、年齢とともに野球の塁間や広いフィールドを駆け巡るのは少々しんどくなった野球愛好者がソフトボールに転向してくるといったケースも多々見られるようになる。

世界に目を向けると、皮肉にも前述した1996年の女子ソフトボールのオリンピック正式種目入りを境に、オリンピック種目である女子だけに強化費を注ぎ、男子のソフトボールをやめてしまった国もある。アジアでも、台湾(チャイニーズ・タイペイ)が、一時は日本の「ライバル」となるような競技力を有していたが、現在は女子しかやっていない。「どうせお金をかけるならオリンピック競技である女子に力を注ごう」という考えの国が増えたことは、ある面で「オリンピックの弊害」ともいえる現象だった。

今回、2020年東京オリンピックで野球・ソフトボールが正式種目として追加種目入りしたことは喜ばしいことであるが、それと同時に、「男子ソフトボール」と野球において同じような立場にある「女子野球」とともに、1競技4種別(男子野球・女子野球、男子ソフトボール・女子ソフトボール)がオリンピック競技として実施される日がくるように、今後ますますの努力が必要となる。

## DATA

(公財) 日本ソフトボール協会 平成27年度チーム登録数

	クラブ	実業団	大学	教員	レディース	エルダー	エルデスト	一般男子	壮年	実年	シニア	ハイシニア	高校生	中学生	小学生	計
男	513	158	137	72	-	-	-	681	631	465	666	407	282	83	1391	5486
女	60	29	99	-	433	154	88	-	-	-	-	-	1374	1635	375	4247
計	573	187	236	72	433	154	88	681	631	465	666	407	1656	1719	1770	9733

# 黎明期

## 日本男子ソフトボール

男子ソフトボールの歴史を紐解いてみると、1966年に第1回世界男子選手権がメキシコ・メキシコシティで開催され、日本はこの第1回からすべての世界選手権大会に参加し、今日に至っている。当初は、「日本代表チーム」が編成されることはなく、国内で結果を残したチームが「日本代表」として世界選手権に派遣されていた。

記念すべき第1回大会には、「日本製鋼所」(広島)が、「日本代表」として派遣され、3勝7敗。参加11カ国中6位という成績を残している。優勝は「ソフトボール発祥の地」であり、ソフトボールの「母国」であるアメリカが飾り、記念すべき「初代チャンピオン」に輝いている。

1968年には第2回大会がアメリカ・オクラホマシティで開催され、日本からは「埼玉県庁」(埼玉)が参加。1勝8敗で参加10カ国中8位の成績を残している。

その後は「4年に1度」の開催となり、第3回大会は1972年にフィリピン・マニラで開催され、前年の全日本一般男子選手権大会(現在の全日本総合男子選手権大会の前身となる大会)で優勝を飾った「丸善石油松山」(愛媛)に3名の補強選手を加えたチームで大会に参加。5勝4敗で参加10カ国中5位の成績で大会を終えた。



1968年 第1回アジア選手権開会式

## 世界に通用する 最強軍団 日本代表チームの編成と、 不世出の大投手の出現で 世界の舞台へ本格参入

1976年の第4回大会から、「最強チーム」を編成し、「世界に挑もう!」との機運が高まり、初めて本格的な「日本代表チーム」が編成された。4回の選手権大会と3回の強化合宿を経て、ニュージランド・ロアハットでの大会に臨んだ。

この大会では、その後、日本の男子ソフトボール界で国内大会優勝27回等、一時代を築き、「不世出の名投手」と呼ばれる三宅豊(現・公益財団法人日本ソフトボール協会副会長・選手強化本部長)が初めて世界選手権に出場。「日本のエース」として世界の舞台に第一歩を踏み出した。

大会には7カ国が参加。日本は予選リーグを6勝6敗の4位で通過したが、決勝トーナメントでは初戦で敗れ、結局4位で大会を終えた。

1980年の第5回大会は、アメリカ・タコマで開催され、14カ国が参加。日本はカナダで大会直前合宿を張り、「本番」に臨んだ。日本は予選リーグを4勝2敗で通過。決勝トーナメントに進んだが、それまで負けたことのなかった台湾に敗れ、7位という成績に終わった。

この大会では、田中誠一選手が大会最高打率を塗り替える活躍で首位打者を獲得する等、内容的には「大きな手応え」をつかんだ大会であった。

翌年、1981年には「第1回世界ユース選手権大会」(後の世界ジュニア選手権大会)が、カナダ・エドモントンで開催され、日本は男女揃って優勝するという「快挙」を成し遂げた。しかし、このときの参加国はわずか5カ国であり、この優勝を最後に男子ソフトボールは世界大会での「優勝」から遠ざかることになる。

1984年には「第6回世界選手権」がアメリカ・ミッドランドで開催され、大会には16カ国が参加。この大会では2セクションに分かれて予選リーグが行われ、日本は5勝2敗の3位で決勝トーナメント進出を逃し、5〜8位決定戦に回り、5位を確保した。

また、この大会では、家竹隆之選手が5割8分3厘のハイアベレージを残し、首位打者を獲得する大活躍を見た。この「第6回世界選手権」は、男子ソフトボールの世界的な動向、勢力図を示す上でも、大きな「ターニングポイント」となる大会であり、それまで優勝を分け合っていたアメリカ(優勝3回)、カナダ(優勝2回)の両雄に、ニュージランド(優勝2回)の両雄に、ニュージランドが割って入り、この大会以後は、アメリカ、カナダ、ニュージランドが「世界の3強」と呼ばれるようになり、日本はその「3強」の一角を崩すことを目標に強化を進めていくことになる。

# 新たなエースの誕生！

世界への挑戦、バトンは次世代へ……。



1988年には「第7回世界男子選手権大会」がカナダ・サスカトゥーンで開催され、14カ国参加。大会はシングルラウンドロビン（1回戦総当たり）の予選リーグを行い、日本は9勝4敗の5位。前回大会の覇者・ニュージーランドから初勝利となる「大金星」を挙げながら、初戦からの3連敗が響き、決勝トーナメント進出はならなかった。

この大会では、長らく「日本のエース」として屋台骨を背負ってきた三宅豊が4度目の世界選手権出場。次代を担う「若きエース」西村信紀と揃っての大会出場となったが、両投手の「揃踏み」はこれが最初で最後。三宅豊はこの大会を最後に日本代表を引退し、「日本のエース」の称号と「世界への挑戦」のバトンは西村信紀へと引き継がれた。

三宅豊は、この4大会にわたる世界選手権出場が高く評価され、日本人としては初めて「プレイヤー」（選手）部門でISF（国際ソフトボール連盟）殿堂入りを果たすことになる。

翌1989年の「第3回世界男子ジュニア選手権大会」では、「日本代表」を引退した三宅豊が監督に就任。今度は「指導者」として「世界の舞台」への挑戦がはじまった。

大会は、カナダ・プリンスエドワード島で開催され、参加7カ国がダブルラウンドロビン（2回戦総当たり）の予選リーグを行い、上位4チームがページジステム（敗者復活戦を含むトーナメント）で行われる決勝トーナメントへ進出する試合方式で覇が競われ、日本は予選リーグを6勝6敗の3位で通過。

決勝トーナメントでは、初戦でアメリカを破り、3位以上が確定。続くブロンズメダルゲーム（3位決定戦）でもカナダを相手に1対2の接戦を演じたが、惜

しくも敗れ、3位に終わった。

1992年の「第8回世界男子選手権大会」はフィリピン・マニラで開催され、18カ国が参加。直前までニュージーランドで強化合宿を行って大会に臨んだ日本は、「若きエース」西村信紀がその才能を開花させ、ベテラン・弘瀬拓生、北義男、同世代の大村明久、それに続く世代の宮平永義が揃う投手陣が充実。2セクシオンに分かれて行われた予選リーグを7勝1敗の2位で通過。ページジシステムで行われた決勝トーナメントでは、強豪・ニュージーランドに0対1で惜敗。「世界の3強」の一角を崩すまでには至らなかったが、確実にその「距離」を縮め、過去最高位となる4位で大会を終えた。

1993年の「第4回世界男子ジュニア選手権大会」はニュージーランド・オークランドで開催され、7カ国が参加。前回に続き、三宅豊率いる日本代表チームは、ダブルラウンドロビンの予選リーグを8勝4敗の3位で通過。ページジシステムで行われる決勝トーナメントへと駒を進め、初戦でオーストラリアを4対1で撃破。ブロンズメダルゲームでは、カナダに2対3で敗れたが、前回大会に続き、3位入賞を果たした。

また、この大会では、後に日本の「主砲」となり、「二振り」で試合を決めることのできる「大砲」岡本友章（現・公益財団法人日本ソフトボール協会理事、男子日本代表ヘッドコーチ）が国際舞台へデビューを果たしている。

た。

一方、日本に敗れ、「敗者復活戦」に回った「王者」ニュージーランドは、「必ずここに戻ってくる」の言葉通り、敗者復活戦を勝ち上がり、ファイナルで日本と再戦。日本が1点を先制したものの、ホームランで同点に追いつかれ、最終回、犠牲フライで決勝点を奪われ、限りなく「世界一」に近づきながら、「頂点」に立つことはできなかった。

2001年の「第6回世界男子ジュニア選手権大会」はオーストラリア・ブラックタウンで開催され、10カ国が参加。三宅豊監督の後を引き継ぎ、高知・岡豊高で春の全国高校選抜、夏のインターハイ、秋の国体等、数々の国内タイトルを手にし、「向かうところ敵なし」の状態であった知将・弘瀬拓生監督率いるチームが快進撃を見せ、予選リーグを8勝1敗の2位で通過。

「連覇」を狙う「ホスト国」オーストラリアと、予選リーグ・決勝トーナメントで三度にわたる「死闘」を演じたが、2mの大型左腕・アンドリュウ・カークパトリックを中心としたオーストラリアの前に屈し、準優勝に終わった。



## The Golden Age

投×打のピース出揃う！  
限りなく世界一に近づいた

# 黄金時代

誇る存在として君臨することになる。

また、2001年の「第6回大会」で「連覇」の原動力となった身長2mの大型左腕・アンドリュウ・カークパトリック、2005年の「第7回大会」で「3連覇」を成し遂げた立役者であり、「世界最速」135キロ超の右腕・アダム・フォーカードが、後にオーストラリア代表チームの「左右のエース」として成長し、2009年の「第12回世界男子選手権大会」で「世界一」を勝ち獲るサクセスストーリーを描くことになる。

2000年の「第10回世界男子選手権大会」は南アフリカ・イーストロンドンで開催され、大会には世界各地の予選を勝ち抜いた16チームが参集。日本は予選リーグ・セクションBを6勝1敗の2位で通過。両セクションの上位4チームによる「ダブルページジシステム」で行われた決勝トーナメントでは、日本は初戦で予選リーグ・セクションA1位、「連覇」を狙う王者・ニュージーランドと対戦。「主砲」岡本友章のホームラン一発で挙げた得点を、「エース」西村信紀「切れ味抜群」の左腕・天野充敏、「炎のストッパー」飯田邦彦と3投手をつなぐ投手リレーで守り切り、1対0の完封勝ち。セミファイナルでもアメリカを2対0で撃破し、初のファイナル進出。「世界一」の座に「主手」をかけ、ファイナルで待ち受ける形となっ

1997年の「第5回世界男子ジュニア選手権大会」はカナダ・セントジョンズで開催され、日本は初めて決勝トーナメントに進めないという「屈辱」を味わった。この大会では、オーストラリアが初めて「世界一」に輝き、その後、2001年、2005年、2008年と大会4連覇を果たし、「ジュニア世代」では「無敵」を



# 初の世界一を期待されながら ベスト8の壁に阻まれ続ける 不遇の時代



2004年の「第11回世界男子選手権大会」はニュージーランド・クライストチャーチで開催され、世界各地の予選を勝ち抜いた15カ国が参加。前々回3位、前回準優勝とステツプアップしてきただけに、初の「優勝」への期待が高まった。しかし、予選リーグ・セクションBを5勝1敗の2位で通過したものの、「勝負どころ」の決勝トーナメントでカナダに1対2、オーストラリアに0対5と連敗。「想定外」の5位という成績に終わった。大会は、「地元開催」のニュージーランドが圧倒的な強さを発揮。世界選手権に

6回出場し、10代から「ニュージーランド・ブラックス」の「4番」を打ち続けてきた「国民的英雄」マーク・ソレンソンが、決勝戦で同点タイムリー、優勝を決めるスリランホームランを放つ等、大会3連覇の立役者となり、自らの現役引退の「花道」を優勝で飾ってみせた。また、「日本代表」でも、この大会を最後に、長らく「日本のエース」として活躍した西村信紀が代表チームからの引退を表明。「ソフトボール王国」ニュージーランドで開催されたこの大会で、登板の

## GREAT RIVALS

度にスタンドから巻き起こったスタンディングオベーションの光景は、まさに「壮観」の一言。5度にわたる世界選手権出場、準優勝1回、3位1回という輝かしい成績が評価され、後に三宅豊に続き、「プレイヤー」（選手）としては日本人二人目となる「ISF殿堂入り」を果たすことになる。

2005年の「第7回世界男子ジュニア選手権大会」は、カナダ・プリンスエドワード島で開催され、9カ国が参加。この大会では、自らが「プレイヤー」として「男子日本代表」の「黄金時代」を支えた梅下佳裕、宮平永義がコーチングスタッフに名を連ね、「日本魂」を伝授。日本は予選リーグを6勝2敗の2位で通過し、ペーシシステムで行われた決勝トーナメントでは、予選リーグ8戦全勝の1位、大会3連覇を狙うオーストラリアと初戦で対戦。1対6で敗れ、敗者復活戦に回り、「ホスト国」カナダを12対4の6回コールドで破ってファイナルに勝ち上がり、再び「王者」オーストラリアと対戦。初めに2点を先制されながら、後に「世界最速」の名をほしいままにし、135キロ超のライズ・ドロップを操ることに

なるアダム・フォーカードを相手に、一度は同点に追いつく粘りを見せたが、最後は投手陣が力尽き、2対7で敗れ、2大会連続の準優勝に終わった。2008年の「第8回世界男子ジュニア選手権大会」は（女子のオリンピック開催年に男子の世界選手権開催が重なるのを避けるため、男子とジュニア男子の世界選手権開催年を入れ替えた。また、この年の北京オリンピックを最後に女子ソフトボールがオリンピック競技から除外されることが決まっており、ソフトボールという競技を世界中にアピールする機会を増やすことを目的に、世界選手権の

開催を「4年に一度」から「2年に一度」に変更した）、カナダ・ホワイトホースで開催され、大会には12カ国が参加。日本は予選リーグを9勝2敗の2位で通過。決勝トーナメントでは、予選リーグ1位、「大会4連覇」を狙う「王者」オーストラリアと初戦で対戦。1対4で敗れ、敗者復活戦に回り、予選リーグ3位・4位戦（予選リーグ順位3位・カナダ、4位・ニュージーランド）でニュージーランドを2対1で破って勝ち上がった「ホスト国」カナダと対戦。「王者」オーストラリアの待ち受けるファイナル進出をめざし、「完全アウェー」の雰囲気の中、カナダと対戦し、日本が最終回ツーアウトから起死回生のホームランで同点に追いついたものの、その裏、「まさか……」のサヨナラホームランを浴びるといふ、男子ソフトボール「らしい」ホームランの応酬による「大ドデデン返し」で日本は無念の3位に終わった。

この大会では、日本を破った「ホスト国」カナダが、ファイナルでも大会4連覇を



狙うオーストラリアを相手に、地元の熱い声援を背に戦い、最終回までリードを奪う健闘を見せたが、逆転サヨナラで敗れ、オーストラリアが苦しみながらも「大会4連覇」の偉業を達成した。また、この大会には、後に早稲田大に進学し、プロ野球の北海道日本ハムファイターズからドラフト指名を受ける大島匠が「日本代表」の「4番」として出場していた。

2009年の「第12回世界男子選手権大会」はカナダ・サスカトゥーンで開催され、世界各地の予選を勝ち抜いた16カ国が集結。日本は予選リーグから苦戦を強いられ、予選リーグ・セクションAを4勝3敗、ギリギリの戦いで最終的には3位の座に滑り込み、決勝トーナメント進出。決勝トーナメントでは「大会4連覇」を狙う「王者」ニュージーランドを「あと一步」のところまで追い詰め、延長タイブレーカーにもつれ込む「死闘」を演じたものの、6対10で敗れ、2大会連続の5位に終わった。

この大会では、2mの大型左腕・アンドリュウ・カークパトリック、「世界最速」135キロ超のライズ、ドロップを操るアダム・フォーカードという「左右の二枚看板」を擁するオーストラリアが大会4連覇を狙った「王者」ニュージーランドを破り、初優勝。決勝は「強打」が売り物のニュージーランド・ブラックスとフォーカードが「ノーヒット・ノーラン」を達成するという「驚愕」の試合展開。ジュニア世代で「世界選手権4連覇」を成し遂げた「黄金世代」が代表チームの「中核」に成長を遂げたオーストラリアが「新しい時代」の扉を開き、「世界の勢力地図」を塗り替えて見せた。



新たなエース候補出現で  
ジュニアに見えた

## 光明

2012年の「第9回世界男子ジュニア選手権大会」は、アルゼンチン・パライナで開催され、大会には14カ国が参加。日本はヘッドコーチ（監督）に山口義男が就任。長崎・大村工業高で春の全国高校選抜4連覇をはじめ、夏のインターハイ、秋の国体等、国内タイトルを総ナメにしている「名将」の手腕にも期待がかかった。

日本は予選リーグ・セクションBを5勝1敗の2位で通過。後に、日本人として初めて「130キロ」の球速を記録する岡●建斗を「エース」として戦い、決勝トーナメントでは「大会5連覇」を狙ったオーストラリアを二度にわたって破り、連覇をストップさせたものの、大会最終日が「トリプルヘッダー」となる過酷なスケジュールの影響もあり、熱狂的な声援を受ける「ホスト国」アルゼンチンとのファイナルでは0対5と力尽き、準優勝に終わった。

2013年の「第13回世界男子選手権大会」は、ニュージーランド・オークランドで開催され、世界各地の予選を勝ち抜いた16カ国が参加。日本はヘッドコーチ（監督）に、かつて「世界のエース」として名を馳せ、「切り札」的存在でもある西村信紀を起用。予選リーグ・セクションBを5勝2敗の4位で通過。決勝トーナメントでは初戦のサモア戦に4対2で勝利を収めたものの、次戦で「連覇」を



## 男子ソフトボールへの思い

### 男子ソフトボールU19日本代表が「世界一」に

男子ソフトボールU19日本代表が「世界一」に輝いた！！

第1回大会で優勝しているものの、ここまでの道のりは長く実に35年ぶりのことである。

振り返ると、今からちょうど50年前に私のソフトボール人生は始まった。高校1年生のとき、中学では野球をやっていた私が、ソフトボール部に入り、プレーのスピード感、戦略の緻密さに驚かされ、さらに、「腕を回す投げ方」があるということを知り、ウインドミル投法に取り組んだときから、この競技の「虜」になった。

その後、チーム数は増え、ウインドミル投法は男女ともに主流となった。そして、女子はオリンピック種目入りし、北京オリンピックでは金メダルを獲得するに至った。このことによって、ソフトボール競技は、ウインドミル投法は世間に周知されることとなる。

しかし、男子においては、トップクラスの競技を一般の人が観る機会は少なく、マスコミが取り上げることもなく、そのプレーのスピード感、面白さを伝えることは残念ながらできてはいない。

そんな中での、この度の男子ソフトボールU19日本代表チームの「世界一」は快挙である。来年は、第15回世界男子ソフトボール選手権大会がカナダで開催される。女子が、2020年東京オリンピックに復帰し、金メダルを目指すと共に、男子もまた「世界一」を目指している。

ISF(国際ソフトボール連盟)では、男子のプレーの迫力を伝えようと、世界の強豪(世界選手権ベスト8のチーム)を集めた国際大会の企画しようとの話も出ている。日本国内においても、日本リーグ、小学校・中学校・高校・大学・実業団・クラブ等、それぞれのカテゴリーで素晴らしいゲームが展開されている。そして……街の中でも、たくさんの方がそれぞれの形でソフトボールを愛し、楽しんでいる。今後、さらにソフトボール全体の「活性化」を図り、男子ソフトボールの魅力も伝えていきたいと考えている。

公益財団法人日本ソフトボール協会 副会長・選手強化本部長 三宅 豊

狙う「王者」オーストラリアと対戦。0対4と完敗し、3大会連続で「ベスト8の壁」に阻まれ、5位に終わった。大会は、決勝トーナメントの初戦で「世界最速」の右腕・アダム・フオーカードを攻略し、「連覇」を狙うオーストラリアに5対4で劇的なサヨナラ勝ちを収めた。「ホスト国」ニュージーランドが波に乗り、カナダ、ベネズエラを破り、「王座奪還」を果たした。

この大会では、ジュニアで「結果」を残しているアルゼンチン、ベネズエラ、中南米勢の「躍進」が目を引き、アルゼンチンが予選リーグの日本戦の勝利を皮切りに、かつての「世界の3強」カナダ、アメリカを連破。4位に入り、ベネズエラはカナダ、「連覇」を狙う「王者」オーストラリアを破って、堂々のファイナル進出。ファイナルでは、「ホスト国」ニュージーランドに敗れたが、この試合でも先手を取る等、「世界の勢力地図」が確実に変わりつつあることを感じさせる大会となった。

2014年の「第10回世界男子ジュニア選手権大会」は、カナダ・ホワイトホースで開催され、10カ国が参加。大会の開催が「2年に一度」の開催となった「恩恵」を受け、前回大会で「エース」として活躍し、準優勝の原動力となった岡●建斗が二度目の出場。今度こそ「世界の頂点」に立つべく奮闘したが、予選リーグを6勝3敗の3位で通過。決勝トーナメントを有利に戦える(敗者復活戦へ回る権利を有する)1位・2位を確保できなかったことで、ブロンズメダルゲーム(3位決定戦)で前回大会の覇者・アルゼンチンと激突。同じく大会二度目の出場となったアルゼンチンのエース・ウエムル・マタと息詰まる投手戦を展開。1対1の同点のまま、延長タイブレークにもつれ

込む「死闘」となったが、力投の「エース」岡●建斗がサヨナラホームランを浴び、3位で終戦。

ファイナルでは、日本を破ったアルゼンチンがニュージーランドに9対0と圧勝。大会「連覇」を達成した。

2015年の「第14回世界男子選手権大会」は、カナダ・サスカトゥーンで開催され、世界各地の予選を勝ち抜いた16カ国が参加。日本は予選リーグ・セクションBの初戦でオーストラリアを相手に、ジュニア世代で「世界の舞台」で結果を残してきた岡●建斗が、日本人として初めて「130キロ」の球速を記録。「世界最速」の右腕・アダム・フオーカードと130キロ超えを連発する「異次元」の投げ合いを展開したが、0対1の敗戦。この敗戦が響いたか、その後もセクションBでギリギリの戦いを強いられ、2勝3敗で迎えた予選リーグ第6戦のメキシコ戦でリードを奪われたときには、「予選リーグ敗退」という最悪の事態も頭をよぎった。そこから何とか逆転で勝利を収め、最終戦も勝ち、連勝。ギリギリのところで予選リーグを通過。

決勝トーナメントでは、初戦のチェコ戦には勝利したものの、続くオーストラリア戦では、「世界最速」の右腕・アダム・フオーカードにまたしても三振の山を築かれ、日本の「命運」を託された「若きエース」岡●建斗も5回まで無失点の好投を見せたが、6回裏、スリーランホームランを浴び、0対3の完封負けを喫し、4大会連続の5位で終戦。何度挑んでも跳ね返される「ベスト8の壁」を突き破ることができずに終わった。

2016年の「第11回世界男子ジュニア選手権大会」は、アメリカ・ミッドランドで開催され、12カ国が参加。名將・山口義男ヘッドコーチ(監督)「三度目の

挑戦」で日本が35年ぶり二度目の「世界一」に輝いた。

「世界一」に輝き、「凱旋」した今夏のインターハイ準々決勝、ともに「世界の頂点」に登り詰めたチームメイトが、今度は「敵・味方」に分かれて対戦。小山玲央(佐世保西高/長崎)、長井風雅(御調高/広島)の一步も譲らぬ投げ合いは、男子ソフトボールの醍醐味と面白さが詰まった「インターハイ史上最高の投手戦」として語り継がれる「伝説の試合」となった。

日本人「初」の130キロを叩き出した岡●建斗とともに、高校生ですでにMAX125キロを超える球速を誇る小山玲央、長井風雅とともに競い合い、高め合い、「本物」の輝きを身にまとったとき、男子日本代表が未だ成し遂げたことのない「世界一」が「現実」のものとなるはずである。

### ソフトボールを通して世界を繋げる活動。

世界の「頂点」をめざすだけでなく、アジアをはじめ世界中にソフトボールを普及させ、仲間を増やしていくことも競技活動の重要な役割だ。そのために、選手やスタッフは大会参加の合間を縫って現地の選手たちとの「合同練習」や「技術講習会」といった普及活動を積極的に行っている。

#### ISF(国際ソフトボール連盟)加盟国:126カ国

- 〈ヨーロッパ/39カ国〉 アルメニア、オーストリア、アゼルバイジャン、ベラルーシ、ベルギー、ブルガリア、クロアチア、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、グルジア、ドイツ、イギリス、ギリシャ、ガーナ、ハンガリー、アイルランド、イスラエル、イタリア、リトアニア、マルタ、モルドバ、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、ロシア、サンマリノ、セルビア、スロバキア、スロベニア、スペイン、スウェーデン、スイス、トルコ、ウクライナ
- 〈南北アメリカ/34カ国〉 アンギラ、アンティグア・バーブーダ、アルゼンチン、アルバ、バハマ、バミューダ諸島、ボリビア、ブラジル、英領バージン諸島、カナダ、ケイマン諸島、チリ、コロンビア、コスタリカ、キューバ、ドミニカ共和国、エクアドル、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ジャマイカ、メキシコ、オランダ領アンティル、ニカラグア、パナマ、ペルー、プエルトリコ、タークス・カイコス諸島、アメリカ、ウルグアイ、ベネズエラ、バージン諸島
- 〈アジア/21カ国〉 ブルネイ、中国、台湾、香港、インド、インドネシア、イラク、イラン、日本、ヨルダン、カザフスタン、韓国、マレーシア、モンゴル、ネパール、朝鮮民主主義人民共和国、パキスタン、フィリピン、シンガポール、タイ、ウズベキスタン、ベトナム
- 〈アフリカ/19カ国〉 ボツワナ、ブルキナファソ、カメルーン、ガンビア、ギニア、ギニアビサウ、ケニア、レソト、リベリア、マリ、ナミビア、ナイジェリア、セネガル、シエラレオネ、南アフリカ、チュニジア、ウガンダ、ザンビア、ジンバブエ
- 〈オセアニア/13カ国〉 米領サモア、オーストラリア、クック諸島、グアム、マリアナ諸島、マーシャル諸島、ミクロネシア、ニュージーランド、パラオ、ババア・ニューギニア、サモア、ソロモン諸島